流
琵琶

敦盛

宗家 橘旭翁先生校閲

上の巻

大阪

特44
86
265
109

絃中傳人
意緒

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏
柳江題

敦盛

上の巻

玉蘭作

祇園精舎の鐘の聲　諸行無常の響あり
娑羅双樹の花の色　盛者必衰の理を顯す
驕る平家の榮華の夢も　ひよどりごへを吹下す
嵐にさめて明かしがた　須磨のうらわの友千鳥

啼音を磯にのこしつゝ　影は波間にかくれけり
茲に平家方の一門にて　参議つねもりの三男
無官の太夫敦盛は　父兄弟のあとをしたひ
駒をはやめてたゞ一騎　つれも渚に着き給ひしが
すでに御座船も兵舩も　遥の沖に漕出でければ
詮かたなみに駒を入れ　四五段許り泳がせ給ひける
心のうちのさびしさを　推し測り進ゐらするに
むれをはなれし子雀の　ねぐら索むる風情にて
哀れといふもおろか也　時しもころは壽永三年
如月七日のあけぼのに　吹きすさびたる北風の

なごりは尚(な)ほも絶果(たえはて)で　身(み)の浮(う)きしづみ泡沫(うたかた)の
淡路(あはぢ)しま根(ね)や阿波(あは)の沖(おき)　通(かよ)ふ千鳥(ちどり)のそれならで
駒(こま)の足掻(あがき)もにぶりつゝ　今(いま)や行手(ゆくて)もしらなみに
任(まか)せて手綱(たづな)かいくりつ　あせるこゝろは梓弓(あづさゆみ)
ひきかへさしど祈(いの)れし共(ども)　時(とき)に利(り)あらず騅(すゐ)ゆかず
山抜(やまぬ)くちからなよ竹(たけ)の　青葉(あをば)の笛(ふゑ)を身(み)に帯(た)びて
ゆたのたゆたに漂(たゞよ)ふは　唯一(たゞひ)とひらの紅葉葉(もみぢば)の
立田(たつた)の川(かは)にちり浮(う)かぶ　さまとも見(み)ゆる許(ばか)り也(なり)
斯(かゝ)る所(ところ)に熊谷(くまがや)の次郎直實(じろうなほざね)　遥(はるか)に見(み)とめ追(た)ひ来(き)たり
軍扇(ぐんせん)サツト打(う)ち開(ひら)き　それに渡(わた)らせたまふは

平家の御大將と見奉る　まさなうも敵に背面を
見せたまふものかな　返させ給へ〳〵と呼はつたり
敵に聲をかけられて　いかで猶豫のあるべきぞ
敦盛駒の鬣立てなをし　汀の方に引返し給へば
熊谷も駒を馳せ寄せて　互に打もの抜きかざし
テウ〳〵ハッシと切結びしが　忽ち馬上に引組んで
浪打ち際にドウと落つ　しばしが程は揉合しも
熊谷遂に敦盛を組敷て　すでに御首あげんとて
御兜を押上げ見奉るに　薄化粧に鐵漿くろ〴〵
としはいざよひ桂の花　つゆもしたゝる玉の面

光あふれんよそほひは　天津乙女のかんばせに
朝日の匂ふそれよりも　一入まさるあでやかさ
畫かまほしき氣色なり　さすがにたけき熊谷も
年ばへおなじ小次郎に　思ひ比べて手もゆるむ
やけ野のきゞす夜の鶴　貴き賤しき押しなべて
子を思はぬぞなかりける　理せめてあはれなり

明治四十三年六月十日印刷
全　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎
電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂
長電話東二七〇番

265
109

絃中傳

意緒

明治
43. 6. 27
内交